

## 巻 頭 言

前・学術委員会委員長／東北大学大学院理学研究科

大野泰生

日本数学会学術委員会の活動に筆者は 2021 年 7 月から運営委員として加わり、2024 年 7 月から 2026 年 6 月までの 2 年間は委員長として携わりました。現在もまだ委員としての任期を 10 か月残している状態ですが、早くも巻頭言の大役を仰せつかりました。

さて、まもなく MSJ-SI（日本数学会季期研究所）が無期休止になることを皆さんはご存知でしょうか。今年度 3 月に計画されている第 19 回 MSJ-SI で（一旦？）終わりになり、その後の予定はありません。2024 年にテーマ募集を停止したためです。学術委員会は活動の二本柱の一として MSJ-SI の公募・審査・運営に携わっていますが、募集停止は理事会決定の後に知りました。私の知る限り学術委員会への事前相談や意見聴取はありませんでした。実際私は、第 20 回 MSJ-SI（2027 年度）のテーマ募集開始の記事を、例年通り「数学通信」第 29 巻第 3 号（2024 年 11 月）に掲載すべく編集部に提出していましたが、この記事は急遽差し替えになりました。その後「数学通信」第 29 巻第 4 号（2025 年 2 月）に当時の理事長から“「日本数学会季期研究所」（MSJ-SI）の募集停止について”という記事が出ましたが、停止の理由は、“本会財務状況の改善を最優先課題とするため”となっていました。悲しいことです。

MSJ-SI は、公募で集まったテーマ（実施計画）の中から年に一件が採択となり、学会からの各種支援（資金援助・事務サポート等）を受けて、採択決定の 2 年後の年度に国内で開催される、学会の顔の一つとも言える重要な国際研究集会です。若手や周辺分野の研究者向けのサーベイの充実と、アジアの国々との交流に大きな特徴を持ちます。実際、2 週間の国際集会として計画されることが多く、1 週間は教育的なプログラム、他の 1 週間は高度な国際研究集会とされることが概ね標準になっていて、大韓数学会と台湾数学会から大学院生・若手研究者の派遣を受け入れています。教育的なプログラムとして、海外の著名研究者の連続講義が複数企画され、年代を問わず国内の研究者にとって大変貴重な学びの場となり、併せてアジア諸国からも幅広い年代の聴講者が集う、すばらしい機会になっています。数学を志す内外の大学院生・若手研究者に多大な影響を与え続けてきたことは間違いありません。

MSJ-SI のプロシーディングスは、日本数学会の ASPM（Advanced Studies in Pure

Mathematics) として刊行されています。ASPM は日本数学会が主催した国際研究集会など重要な研究集会の報告論文集として 1983 年に創刊されました。新規研究成果の論文に加えて、理論の創設者等によって著わされたサーベイ的な論文なども掲載され、これから研究を始める若手研究者や、そのテーマの最新の研究成果に関心のある他分野の専門家にとっても、貴重な文献であり海外でも販売されています。この ASPM も、既に計画されているものと、第 19 回 MSJ-SI の報告論文集の刊行をもって休刊になるようです(「数学通信」第 31 巻第 1 号(2026 年 5 月)“ASPM の休刊について”。

MSJ-SI 名義では 19 回の開催を数えますが、その前身となる集会がありました。MSJ-IRI (日本数学会国際研究集会) は、やはりほぼ年 1 回のペースで 1992 年度から 2006 年度まで計 15 回開催されました。MSJ-RW (日本数学会リージョナルワークショップ) は 1996 年度から 1998 年度の期間に計 6 回開催されています。これらの後継企画(あるいは再検討強化版)として 2008 年度にスタートしたのが MSJ-SI でした。そこに至るまでの経緯については「数学通信」第 16 巻第 1 号(2011 年 5 月)掲載の、古田幹雄 元・学術委員会委員長による“MSJ-IRI, MSJ-RW から MSJ-SI へ —ICM90 以後—”と題する記事にとっても詳しく纏められています。当時の理事会の承認のもと学術委員会(小島定吉, 中島啓 元・学術委員会委員長)において、“学会の積極的な関与による国際集会の在り方”が高い意識と広い視野で議論されていて、大変誇らしく感じます。また、そこで掲げられている本来の目的 3 件は、学術委員会の働きのもと現在までしっかりと受け継がれ達成されていると感じます。

MSJ-SI は大きな国際集会であり、学会の強い支援があるとは言え組織委員長をはじめ組織委員会の仕事量はかなり多くなるため、昨今の大学事情(つまり学内業務多忙と資金不足など)とも多少連関して、ここ数年の応募件数が年 1~2 件であったことは事実です。しかし、応募件数が少ないと言ってもゼロではなく、需要はありました。半年ごとの年会・秋季総合分科会の機会に開催される学術委員会の会合では、前半の時間帯にその年度の MSJ-SI と準備中の MSJ-SI の組織委員長(概ね 3 人)に参加していただき、準備状況報告や開催報告を行っていただくことで、現場の状況や課題を把握するとともに、組織委員長間での情報の共有・継承を図ってきました。MSJ-IRI の頃から 30 年以上かけて培われ、コロナ禍による度重なる延期などの艱難も経て熟成されてきたノウハウや伝統が、ここで途切れてしまいかねない状況であることを、前・学術委員会委員長として大変申し訳なく残念に感じています。学術委員会における MSJ-SI の審査や支援の仕組みについても同様の状況かも知れません。一日も早く学会の財務状況を改善し、学会による意義深い国際集会が継続的に開催されることを切に願っております。